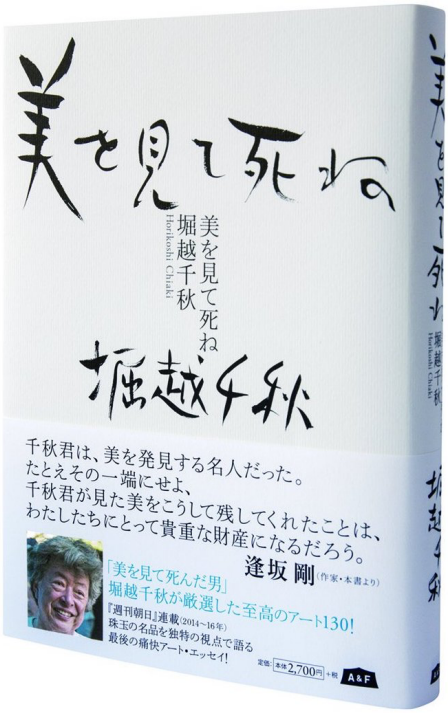

「美を見て死ね」
エイアンドエフ　2017 年 10 月

美術品、絵画、水墨画、彫刻、仏像、建築物、写真など
古今東西のアートを多彩な芸術家であった堀越千秋が独自の視点で痛快に連載したエッセイです。
毎週『週刊朝日』に連載された 130 週分のページが一同に一冊になり
新たにレイアウトを変えより見応えと読み応えのある本に仕上がっています。
珠玉の名品を独特の視点で語る
最後の痛快アート・エッセイ!

夢枕獏
読もうと思って、一年以上も手元に置いていたのだが、読んだのは今年に入ってからである。今のところ、今年読んだ本のベストワンである。
画家である堀越千秋が、『週刊朝日』でずっと連載していたものをまとめた本だ。世界中の絵や彫刻、あるいは美術作品として作者が意図していないものまで、一作ずつカラー写真（絵）で紹介し、評を加えている。いいぞ。文章がいい。天然の現象のように、著者のペンから言葉がこぼれ出てくる。この本の中の 138P「無明の風の中で」（曽我簫白『柳下鬼女図屏風』）を読んでごらん。泣くぞ。ぼくは泣いた。涙が止まらなかった。堀越千

秋はほんとに凄い。
ゴッホの絵については、こうだ。
「ゴッホの絵を見ると、僕はいつも、泣きたくなる。遠くからでもあそこにゴッホがあるなと分かる。普通に、素朴に、畑のおばさんのように、ある。」
いいだろう。凄ェだろう。
二〇一六年に、マドリードで亡くなられた。
もっと生きて欲しかったよ。

逢坂 剛
千秋君は、美を発見する名人だった。
たとえその一端にせよ
千秋君が見た美をこうして残してくれたことは
わたしたちにとって貴重な財産になるだろう。

読書メーターより
コマックさん
どこかしらで見たことのあるものから、今まで全く知らなかったものまで、古今東西を問わず、筆者のおすすめの美を紹介してくれます。ただ、皆さんも書かれているように、美以外の政治的な感想は確かに不要ですね。生きていたら読むのを止めていたかもしれない本でしたが、読み出してから故人と知り、最後まで読むことが出来ました。図書館に並んでいた背表紙の題名に惹かれて手に取った本ですが、「死んだものは美しくなる」のだなぁとあらためて思いました。

TS さん
何度でも読みたいし、もっともっと読みたい。 もっと書いてくれよー泣 いや、あのね、芸術家こそ政治を語るべきなんだよ。

Keiko Fuse さん
様々なジャンルの「美」について、写真・作者の紹介付きで著者が諸々語る、という趣向ですが、 リズミカル？軽妙？(すみません、、、語彙が乏しく的確な言葉が探しだせません)な語り口で皮肉や社会批判など織り混ぜられたそれは共感せぬまでも、なるほど、そんな見方感じ方もあるものか、という新鮮な感覚がありました。

Kuliyama さん
さまざまな美術作品が紹介されていて手にしました。美術関連以外のコメントは不要（というよりも不快）と感じ、それが残念でした。

いくさむさん
古今東西の様々な美術品を取り上げ、歯に衣着せぬ鋭い語り口で美について説いていく。しかし、そこにはユーモアがあり、優しさも感じられてついつい引き込まれる。美とは何か？それはどうやら金儲けとは対極にあるというのが著者の信条のようだ。時々何度も読み返したくなる本だ。まずは東村山にある東京都下唯一の国宝建造物、正福寺をじっくり見に自転車で行ってみたいと思う。

鮒ひと箸さん
図書館本。週刊朝日への連載をまとめた本だそうだ。随所に脈絡もなく当時の政権をイヤミたらしく揶揄する記述がみられるが、どれも品がなく、題材にした作品を冒とくしていると感じられた。それらを除けば内容は良かっただけに残念だ。
かすみさん
気付いてしまいました。大学でも芸術文化論専攻してきたけど、やっぱりわかんないわ。堀越千秋のキレのある文章に惹かれて読み進められたけど、徐々に反安倍コメントと諸賢と言って読者をバカにする姿勢に違和感を覚え始める…まあそれはいいけど、堀越さんの美への信仰の強さはよくわかった。だけどやはり凡人な諸賢には、なんでどうしてそこまで美を信頼できるのか、伝わってこなかったんだよな、こんなに分かりたくて読んでるのに。

Okatake さん
週刊朝日連載をまとめたもの。 スペインで後半生を過ごされた堀越千秋の芸術エッセイ。 遠くヨーロッパで長く生活されたこその日本の芸術への文章がより洗練されているように感じました。

Tomatona さん
よい！毎朝、少しずつ読むのが楽しかった。

さくはさま
画家による美術エッセイ。絵画、水墨画、陶芸、仏像、彫刻、建築など世界と日本の美術について幅広く語っている。スペイン・マドリッドに暮らしていたということで、ベラスケス、ゴヤやダリ、ピカソ、エル・グレコといったスペインの画家の作品も。安倍政権や拝金主義への批判も多い。